異界の中の母なるものへの憧れ　―鏡花にとっての辰口鉄泉の伯母・ちよの娘・ふみー

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>松原 秀江</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大手前大学論集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1160/00001370/">http://id.nii.ac.jp/1160/00001370/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Creative Commons : 免許 - "なまけ - ぬり・ぬり"
要旨

異界の中の母なるもののへの憧れ（中）

鏡花にとっての辰口鈴泉の伯母・ちょうの娘・ふみ

松 原 秀 江*

キーワード：すゞ、卯塚婆の天女、由緒の女、卯辰山と辰口鈴泉、ちょう、ふみ、二人、小畑色艶恵、松本京太郎、新宿夜物語、

継三味線、鼓の精、身延の鶴、歌行燈、芸人、

数え年十歳で、近代の名家葛野流大鼓師の娘だった母・すゞを失った鏡花にとって、すゞの長兄・孫恵の未亡人・ちょうとの娘たち、

特にすゞ同様江戸生まれのふみが、代々伝えて今はない鼓の精として、紅葉を師と仰ぐ鏡花の作業としての成長に深くかかわることを、

清次とすゞの出会いのきっかけも含め、能とのかわりの中で述べた。
再度「湯島譜」（明32・1）を見てみよう。神月桟（文字上は子爵の婿だが、鏡花がモデル）は、築吉（芸者、桃太郎・すずがモデル）と何となくよく似た身の上だ、と思っている。というのも仙台生まれの桟が、「土地の塗物師の子」で、農なる家計の下に育ったものでなかったのならず、母親は若死し（中略）、やがて父親も亡ったからでない。少々長いが、次のように「十九」記されている。

①その母親というのは、その姉江戸から住替えを来た有名な芸娘だった。のみなし、これを便で同じ仙台の土地へ後から出て来た母の妹夫婦も、また思ったような「父の姉の子が一人、桟より年上であったのが、それもまた同じ勤めの止むを得ぬ境遇であっ

②世の中から噂に呼われる身で、

と、更に又、桟の実の妹が一人ある。内の都合で、生えると直ぐ音信不通の約束で他へ養女に遣わしたのが、年を経て風の便に聞くと、それも家族流して、同じく、左遷を取る身になったという。野辺の途が済んで、七々四十九日というのに、自ら恥じて、それと知りつつ、今まで音信なかった妹者人、その頃、豪商の愛妾になっているのが尋ねて来て、その小包と、従姉妹三人が竜の親を探るような思いをして門面してくれた若千金とで、ようよう後年出来たくらい、桟の家は窮していた。

(66)
通夜物語について後述。この部分の「妹夫婦」の「妹を」にすれば、明治十年二月七日、すなわち長兄・中田孫彦が亡くなると（享年三十）と十歳年下のその妻・ちよ（嘉永元年一八四七年生まれ。すなわち六歳年上の）は、二人の娘をつれて、金沢から小松へ小松にから明治二十三年六月、当時鰐山寺元興が在って、猿吹を極めた辰ノ口釣鉢が、伯父（礼吉の母の兄）の死後。四ニ上の温泉水へ、再縁してからも、それほどよく東内から伯母が呼んで、「この城へ出る度には、きっと連れて帰りて遊ばしてくれたんだ」と話す伯母は、鰐山寺の台所で、時々手宮へ行くような、嬉しい、楽しいものでした。そこでこのように記されている。彼は毎朝になっても、お光は小児のやうやうやう、という意味で、僕はもう二十だね。」「中略、」「辰の口へ行かしたやつ、叔母様に別に特別に大いに怒らないで、帰りに寝て寝て寝て寝てね」。馬鹿にいへ、僕はもう二十だね。」

土井『本草』二十四・四によりれば、浅野川、川上の、その天神橋の上へ行くて、せめて月が晒されて、また曇の夜は、山の草叢、山の中へ堂が飛ぶのに、母親の涙と思ふ可かに思うが、其の物語が使われている。辰ノ口温泉の叔母は、血のつながりはないといえ、既に亡き母の兄（本家の伯父）の妻、その町の代わりに、「馬鹿にいへ、僕はもう二十だね。」

（68）
母親の再会　

父の前に静かに立つ母は、彼女の存在を隠すようにして遠ざかって行った。母が帰ることを知った父は、心を痛めた。母が再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

しかし、母が行方不明であることに対する父の気持ちが次第に高まっていった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。

鏡花（6）は、再び家に帰ることを望んでいた。鏡花は、再び家に帰ることを願っていたが、それは不可能であった。母のことも忘れてはいかが（6）ことは避けられなかった。母が再び家に戻ることを願っていたが、それは不可能であった。母は再び子供たちに会うことができず、家族の生活は一時的に落ち着いた。
金沢へまわり候てはもどりたうらの方から本梅へ電話などかかれ大橋などへもかひにまわる里居候やること御座候ては余計な。「

しかし、この文面から類推すれば、大橋が同じ書簡で、「大変つがうよく」選んだ今度のことごとに比較する。大聖寺の時のやうなめどか、

種々の話を総合すると、その勤め先は山中温泉であったようである。あまり近く近くの大聖寺縁者等、ここ勤めをやめて金沢に出て、うわらの生活を送り、その後も、大平市益田の後、病気となり、鏡花に引き取られ、大塚時代に祖母と共に、同様して

と云いうえることもでき、①の

にいかわるる。

だが、他賀に「豪商の愛妻」の時期があったとして、「それが小使」と鏡花の「家」を助けたとは思えない。

上記の状況で金沢に戻り、周間の困感も省みず高崎に出ている。鏡花は他賀に「送金」し続けている。やかにいて云えば、円融寺の書記に卜上された母・すが、卯辰山に改葬された時、何のためにそれを見に行くのか、わからない。

お久の境遇が、やかと大差ないなら、他賀と銘え変わらないだろう。後のことだが、やかが呉服の行商と結婚するのは、明治三十六年

『相模屋の兙童』四

十八年後に帰ると、鏡花に「時折生活費の不足を訴え、援助を乞う」、というなら、鏡花の二人の妹たちの暮らしぶりは、ほとんど同
吉田昌志の『年譜』によれば、
鏡花が近代小説に出会うのは、明治二十年（1887年）
新学校の受験を志しながら、『遊戯中』の『打怪我』で断念、
失意の母のない鏡太郎『鏡花』は、子供ながら当時誰もが夢中だった馬琴
の『近世説美少年錦』の外に、明治十八年『小説神錦』を出して、
人間の内心を描くことを近代小説の第一条件とした、埒内の遺産の『妹
と背かみ』『此処やかしこ』など読んでいる。そして明治二十二年
改造社版『年譜』には、次のように記しているのに、改めて
注目してみよう。
①四月、友人の下宿にて、はじめて紅葉先生の『いろ憐恵』
を読む。庭には桃桜咲き。憐に繋いの棟の音、鼓の調子に似て聞こえたり。
②またの小説を耽読せり。低低、読書。見計は、辰口鎮泉に住ひつつ、
母なきわれをいとしき。叔母の小遺と、其の妹の小分、
の化粧料なり。
まだ子供ながら、一人立ちの年令に達していた鏡花・鏡太郎が、友人下宿の一生涯師と仰ぐ紅葉その人の作品の中でも、「もっ
ともロマンチックな人」と人深く認められていた「枝垂れ桜」の出迎えの詩は、鏡花に興味深い。出会うのは、誠に興味深い。

の会う鏡太郎は、雪の降りしきるとんとんょり隠された北国の空に、春それは春につながる。雪が降る花であるとともに、「桜」は後に宿命
を抱かれた、やんちゃな鏡太郎の世界にも重なるだろう。そして下を向いて呟く、鏡花はしばらく、幼な子をその胸に抱いて
静かに、えむ母親の笑顔を見た。「桜」の美しい音が、鼓動をとらえた幼い頃の草紙の世界につながり、妹・弘子の子供たちに、
「桜」の授与者、錦緋の山姥・錦麗・の世からの贈り物のように、思えたからではなかったろう。

記憶忘却し

と記している。だからこそ、
①の文章は数行に至ってゆくのだろう。

だが、すずの実の兄・弘子を亡くした年代が、二人の娘をめぐり小松から辰口へ移転したのが、明治二十二年のこととすることになる。新編泉鏡花集の「年譜」にはない。

と、そこで母のようになじむようにに自らを、「幾歳になってしまっても」（見討成）」の如く記されている。新編泉鏡花集の「年譜」では、

明治二十二年のこととされてる部分が、次の通りに記されて

（72）
夏、辰口記念館。帳面を見た時手にした一枚の御供殿書に、紅葉先生の『夏夜』一枚を見出す。次第に、小説創作の念強くなり、

更に上京して「都会の廣大」のために「驚き」、「氣おくれして丁寧」で、紅葉宅を訪れる「勇気」も「挫かれ」。

と『年譜』（改造本）に記す。その餘りの『窮困』にたまりかね、顔にしたのも、『辰口記念館』の『帳面』、中田町の『家』であり、

の清次だが、その明治二十三年一月、年譜に定もし、十四年でないのか。十三日の書簡には、

と記している。一月日を後妻を迎えて、他賠を養女に出していた頃の清次は、かつて御手紙のcbaa。そして又、『温泉宿』一人で切迫。勝気な『亡き友の女』二五．ちも、その思い出に

答える、一つの家を束ねる長男の妻。それがそのときの旅費について、

辰口の叔母さんとの御賀折。一方ならず賀副席のなかく、存じ候。

がある。此間辰口より金丸推梅候。この『金丸』が、所々事もあると云われる。春陽堂版『鏡花全集』巻一の『泉鏡花年譜』などに、

世界の中の母なるものを懸れ。
一新頃物語語では、松吉とお米の会話を通じて、通夜の席にはいないお組と、松吉の幼い頃の姿が浮かび上がらせよう。也て、松吉の母さんが、お米を亡くして寄る近く幼い鏡花。鏡花の、懸れと現実を浮かび上がらせよう。たとえばお米が、

何でも骨やように見えるんです。

と答えているように。

ふみは明治元年、かねは明治四年、そして鏡花は明治六年生まれだから、すなわち生まれ明治十五年、「可愛い兒だった」年下の松吉が生まれた家の下の「三間と次の中間」は、お組やお米、松吉のお祖父母母・すなわち三親がモデルが、

と尋ねる場面のあるのも、そんな思い出が、二重写しとなっているからだろうか。

老若を切って母の著文をした處だ。お常も、モデルたれば文改元生まれは、従妹の娘。娘のお組の娘のお米に、次のように書いている。

前さんが、お組の娘は、東京で生まれたんでも、乳児を抱いて、叔母さん。

いう本質。子にはこの娘が叔父さん。「お米の父や、松吉の母のお組、

に居なすったと云ふ。

御両親。私には祖父母、三人たちと連立てて、貴国へ行ったんだからね。

一間、お組さんは。

前さんがよいか。貫洞の江戸うまれだからね。

異界の中の母なるものへの悼め

（75）
などと。すぐ、江戸から金沢へ下ったのは明治9年、両親の他に乳児を抱えた兄夫婦が述べだった。明治3年には平民になった両親と云われる。事態も、乳児に生でない上総のものだった。その母親、妹のかもと違い、ふみは「貧困」に

大体一定の自分で小屋の前に、一人で立てて居る時、その「鳥居根に結った後姿」は、「母さんや子のように見えた。と云い、

と云い、縁を書いた二子とこの頃の親は、松吉にとって、

と松吉は云い、又その

と云われ、「柿子枝を干して」「縁を書ける」と、

と云う。柿子枝を干して、「縁を書ける」かと思った。

と松吉は云い、又その

表紙の絵が見出したのかと思った。
会いの場に、鏡花の旧蔵の写真をかざされて驚く。[田中源氏]があったという人は、鏡花作品について考えている上でも、なか（

が、最上部の時、お祖母が鏡花の所行ないない、[まだ蔵]の前で、松吉と共に、静の荒れ果てた「鳥の巣のように」な何麦屋を訪れた時には、お祖母さん（ふみ）が

在るかのように、お祖母さん（ふみ）は静に「何にかして取り戻したい、他に何にもない、親たちの記念だから

と、お祖母は「染め」と云い、お能の方で、家にいなかった品は一口でも、その内の内に此家の叔父さん（亡くなって通夜の行われている上杉政忠、モデルは松本金太郎）の方

・ "affles たちが笛の家で、細工人の清次の家・階に、親たちと共に同居していた」としても、不思

の前も「静」だったのかかもしれない。この文章は今、次のように続いている。

さに亡いたい人々に、父さん（先祖）が、祖父さん（中田・源氏、ふみ及び鏡花の祖父）から譲られたどこがあるのか、とお祖母さん（ふみ）が

何故か、鼓が顔に流れている。……有りものやや無いものや、それは分らないけれど、もまた、この何麦屋に訪はつつ相談の出

来るどのお金子なら、何にかして取り戻したい、他に何にもない、親たちの記念だから

と、お祖母は「染め」と云い、お能の方で、家にいなかった品は一口でも、その内の内に此家の叔父さん（亡くなって通夜の行われている上杉政忠、モデルは松本金太郎）の方

世界中の母なるものへの帰り

(79)
と、母親（ちよがモデル）の言葉を通じて、鏡花が「永遠に愛するまで」、枕頭の書として親しんだ「雨月物語」に

「秋の花の夜」「赤湖宗右衛門のよう、義兄弟の宇次郎左の約束の日」

海よく、一日千里的雨・

の言葉通り、みつから髪に伏し、陰風に乗って、やって来た赤湖宗右衛門のように、その大事な「かけがえのない叔父さん」の通夜の晩、

急病に倒れられた「危篤」状態に陥って、電報が着いたその時、「幻の鼓を抱いた白い手」を見せて「お勧め、松吉とお見の前に現れた

と云っていたのであり、松吉も又、新しく親しい故郷が出来たように思っていたことには、既に見た。

もっとふみは、新保の論考によれば、明治三十三年辰口へ移転した才を育てた圓潤した置屋の、一つ目と鼻の先の同町内、伊藤某方

へ嫁いでいる。伊藤家の子孫の「証言」、新保論文の発表は、昭和四十九年八月、松本金太郎がモデルにした叔父が、枠で通じるもの

の「面影」を似てくることを喜び、叔父賞「叔父賞ッ」と云って敬愛した松本金太郎がモデルにした叔父が、枠で通じるもの

の「面影」に似てくることを喜び、叔父賞「叔父賞ッ」と云って敬愛した松本金太郎がモデルにした叔父が、枠で通じるもの

の「面影」に似てくることを喜び、叔父賞「叔父賞ッ」と云って敬愛した松本金太郎がモデルにした叔父が、枠で通じるもの

のかなりの女系花、すなはち疎敵ないが、その一族を支えて愛し、 Defines new character's nature of the field, 生活の基盤を失ってしまった、相伝の藤原の「家」の

と云われる辰口の泉がモデルの「旅人」の金持の、上見を、「鷲」のような不詳な授業が、人の心を知らない。「鬼」か「山贼」のように、

新保は、「ふみは大正五年、松本金太郎が亡くなったのは大正三年、「錦絵物語」の発表は大正四年、大正六年に

と云われる辰口の泉がモデルの「旅人」の金持の、上見を、「鷲」のような不詳な授業が、人の心を知らない。「鬼」か「山贼」のように、

販売無き、鉄壁の「錦絵屋」風情に、思われれたのかかもしれない。

新保は、「ふみは大正五年、松本金太郎が亡くなったのは大正三年、新保論文の発表は大正四年、大正六年に

と云われる辰口の泉がモデルの「旅人」の金持の、上見を、「鷲」のような不詳な授業が、人の心を知らない。「鬼」か「山贼」のように、

販売無き、鉄壁の「錦絵屋」風情に、思われれたのかかもしれない。

新保は、「ふみは大正五年、松本金太郎が亡くなったのは大正三年、新保論文の発表は大正四年、大正六年に

と云われる辰口の泉がモデルの「旅人」の金持の、上見を、「鷲」のような不詳な授業が、人の心を知らない。「鬼」か「山贼」のように、

販売無き、鉄壁の「錦絵屋」風情に、思われれたのかかもしれない。
六

松村が、

主人公慶喜に見立て、旅芸人の女におはあいに会いに来たのを模倣する「身延の鷹」（大谷・1・3）を見てみよう。「私は先生でも大人でもない、米を買って食う稼穂だ」と云い、自らをモデルとし、お安が云い、慶喜も又、

「おー」「お澤さん、妹さん……」」

と私は思はず、故郷の従妹の名を言った。「中略……この時の金子も、また違った意味で、お澤さん、弟がいだくのやうに思へば、その従妹は、養育師を称する、溫泉士を養う商人へ縁着いて居たのである。」慶喜もお澤も「お安も、共に、故郷は、三國（越前）、親たちの一家の「出は東京」

と言すのあは、鈴木の従妹のふみがモデルだろう。慶喜もお澤も「お安も、共に、故郷は、三國（越前）、親たちの一家の「出は東京」

になっている。又、年紀下の其の野郎は、一時は落葉したけれども、と妹がお世話に成った、お主の若さ那で、それを言うために、妹が苦労す
お安が云っていることから類推すれば、お安のモデルはかね、又ふみが辰口で、身の断り、食事などで切の世話を支えていた。

その頃、気の弱い「新潮邸の師匠」は、あるいはふみが芸名だった頃、お主の名前を、そのまま「太郎」に、わずかばかりのお金を、「面してくれ」といたのだろうか。

「寒い、北国の」の「寒の降る」第一、暖かいものでも食べられない貧乏人の息子だっただけん吉が、小達も「友達もない」ままに、「心細が

服裝は悪し、しばしばうずくまる。それだから陰気だし、私は弾き崩しできなかった。気も合せな。

といえばお安が、「闇原の温泉に願女をして居た」姊とは、それはく気が合って、伸よしたったと云い、更にお澤は、

柄を見て、縁直しものの一枚を着せて遊ばれた。少し小達も持たせるし、二人とも小説が好きで、

山家の温泉場の貸本で間に合

と云っているにしも、注目してみよう。ふみもお澤同様、小説が好きで、「新潮」の鏡花「鏡花全集」の中のどれも、

「粋な鏡花の手をやめぬ、うるさくねたる鏡太郎に、草木紙の紡績をして、草木紙の好きにす、鏡花も、後生大事にした」手

を打ったのに対し、「斯くらべて」の「郷里的従姉」の『桜石』の第1部から、本らくはと抜き取ったというより、春陽堂版織物に語られる寸と清次初めての出会いの場でも、

ふみが持つのも、多くは「新潮邸の師匠」の名をもつようになる。「時代か今、北等新時代を舞う」の名もあろうように、従妹のお澤が、紅葉の「名著の一単篇、

三人妻の一章を正しく朗らかに読むのを聞いて、慶吉はその「すばらしい旅の女」は、それを「読誦」することができると思う

（83）
・記されていることに注目しております。従って金銭に敏感なお安が、「日本の花筏界」の「女性の明星」山端筑野としてすり寄り、荷担してしまっている強面書の作品のようであったが、社長兼発行人である「歌舞伎花筏広報」の如きかわしい雑誌になると、『番減少』な御筆代であると相談には選びとるようです。相手には選ぶと論せられ

・担当してしまっている強面書の作品のようであったが、社長兼発行人である「歌舞伎花筏広報」の如きかわしい雑誌になると、『番減少』な御筆代であると相談には選びとるようです。

内々は活字に成るのを喜ぶ人、構は選び、と、次のように「選」とわれてしまっている。

忙しくて、暑くて、苦しい歳を、選手の成らない、柳原寺の和尚の紹介のために

そのときは、編集に寄って、身分相当の良心ゆ

に、署名を擁ぐけ何某分に拘束した（ולם約束した）のを見事に裏切りられた（目次の小説の題名の下に名前が出ていた）ばかりか、
少くとも一石の米は、貰へるべき、と、女発結の視点は、唯一運込まれた。稈はじめた、半分の、いった、上、紙代は慣りから、麻直せと、言

ふ条件、唯二日白発行の日が、かれりとい、言う理由のもとに、絶縁され、剣、彼生命とは、までは行かない、でも、手足の指から、のは、

思いひきその中への、小論文の、小後の次商には、みた、十何行をスッパと切って、落されたのである。

それでは、[除]りに、[勝手]だ、断固として、御説載を断って、見せません。と、言うと、その怪しげな雑誌、歌舞、喜楽社の編集主任、

澤常雄に、「志を立てて苦学のために、上京し」た。昼間は、「雑誌のために」働き、夜は、「夜学に通ひ、それが今の自分の、生命」

なすって、宜しい。

私は単独では、から、御免下さい。

その故郷の父兄、親類…何よりも友人等に、今更合はする面もありません次第で。

共に飢えて苦しんだ、津轻学舎の医学生達のように、幕府瓦解後、四民平等をうたう当時、東京には、特に、大志を抱き立身出世を夢みて、故

郷を出ながる、若を、是迷うかし、者が、多かったのだろうか、「見ず」も、流れる者を、黙って、「見て居られ」ない。「御社の御都合に、

なすって、宜しい。

と、慶吉、レは、生活、の、生なり、の世の楓の、やうで、たよりない、「まだ、逢はぬ、敵人がある、やうで、

可憐、床下、それが、

不思議な現象が、「故郷の、違い。薄青い、湖原の、温海の、湯女、の、眠、「に、つながり、

異界の中の母なるものの、への、懸

（85）
……何處でか。遙に、何處でか。幽に、可懐い従妹のお澤が、渠を呼ぶように、身に誘みて、胸がうつう
て、慶吉は現実のお澤に出会うのである。この『妙な』体験は、かつて幼い鏡花・鏡太郎が、桃太郎・すけに出会うべくして体験した。

老いの時記憶によく似ているだろう。

霧に包まれた月に照らされ、『白い象でも似る』とひろれれた一張の天幕の下に、紅葉先生の名著の一篇。三人妻の一章を正しく朗かに読む。お澤がいたのである。そしてそのそばには、『紅葉集』を手にした木村さん。お澤の『怪しげな情書』。良心の『黄葉を感じ、身延までその雑誌社の社長にお伺いに来て、『商機が大事』なだけの、その余りの身勝手な早戸に懐く。『東京へ帰るのもやめにして、天幕でも捱でいて、お澤と……所に放浪』するつもりでいる。

何故……貴方は、慶ちゃん、そんなに、心が疲れ、つらいんだ。半分ぐらいせて、半分ぐらい取る。小説は美しい言葉が、慶吉に、お澤は次のように云っている。

『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが。……それとも貴方、慶ちゃんは、どんな女でも、死ぬ、と言ふは、破門、しかも。斬つて棄てると同で。廃くと思って居なさいますね。

教通をして遊ぶんだって、手も身も生命がけですよ。貴方は立派なお仕事をして居ながら、人間、人の生命なんか、何に遠慮

もふふを背いてくれなければ死ぬ、と言ふと、と言ふと、と言ふと。

自らの境遇に引きずられて、作家としての意志を貫かない慶吉に、お澤は次のように云っている。

（中略。）慶ちゃん、そんなに、心が疲れ、つらいんだ。半分ぐらいせて、半分ぐらい取る。小説は美しい言葉が、慶吉に、お澤は次のように云っている。

『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが、『中略。』嫌な奴には、御随意にお死になさいと。と言ふが。……それとも貴方、慶ちゃんは、どんな女でも、死ぬ、と言ふは、破門、しかも。斬つて棄てると同で。廃くと思って居なさいますね。

（86）
自信がないから、決して怒りは居りません。……生懸命には行って居ますが、……我身を託ふために、小説の作のために、人が
と云えば、即座に、修行をなさるよ。
と言い放っている。
このお澤の言葉を聞いて、慶吉が
即座に、修行をなさりやすら、母、母の言葉、とも思ひます。
結論を述べるに、半分は嘘と知っても、離れ事が出来ません。
まして、生命にかかっているからです。

異界の中の母なるものへの懸念

（87）
と。そしてその言葉を聞いて、
小児はまたうっと泣いた。

ふるものはありません。

哲・もの言わぬ警が、
神仏の声のことく、きりりと胸に響いたものです。

哲も、「十七八人で若死」したのだから、
すぐに、「身も心も弱かれた」に違いない。
にもかかわらず、
江戸生まれの女らしく、「先祖」
と云った言葉を「生命がけて守って」、
喜多八の「嫁」になったお三重に重なる喜多八の「家」
と云った言葉を「生命がけて守って」、
喜多八の「嫁」になったお三重に重なる喜多八の「家」
と云った言葉を「生命がけて守って」。

歌行灯（十三）で喜多八、

生き抜いて死んで、中華の旅で
喜多八の「嫁」になったお三重に重なる喜多八の「家」
と云った言葉を「生命がけて守って」。

歌行灯（十三）で喜多八、

生き抜いて死んで、中華の旅で
喜多八の「嫁」になったお三重に重なる喜多八の「家」
と云った言葉を「生命がけて守って」。

歌行灯（十三）で喜多八、

生き抜いて死んで、中華の旅で
喜多八の「嫁」になったお三重に重なる喜多八の「家」
と云った言葉を「生命がけて守って」。

歌行灯（十三）で喜多八、
モーテルの次のような云っている（五）。

「金子のために手に渡されなければならなくなつた（九）時、唐三郎（洋画家だが鏡花がモデル）は半之助（生名取りの能役者・松本長）

「俯打のわからない。千両の客が現に愛にあることも、（九）手の（九）百両へ渡したい。千両に身を任すんだ。旦那を止して。

百両へ、情人、命かけ、芸事、芸人、千両へ、旦那、あたち前、世間、素人

と対になっている。お米の言葉通り、

と云のであれば「命がけ」だっただろう。お米もお酒も、従ってそのモデルのため、皆立派な役者だ。

鏡花が鬼神や観音力を信じ、神かしや生まれぬ先世などに深い関心を示す作家であることを考え、それらは世俗を超えた（修

行）によって、見えるか見えないか、感じられるか感じられないかというこだわることで、現実世界はそのままで、異世界につながっている

送られて旅立つお澤を、「八戒悟浄に守護」された。『渡天竺』の順風の読者に念とられるのは、まことに興味深い。慶吉とお澤の前途を

とこの作品は終っている。
新保千代子 "新資料紹介 妹かつ女をめぐる書簡と自筆年譜訳正 " 鏡花研究 三号 で

藩生氏 "藩生と郎 " はまだ今やの鏡花 大東産業企画

実に記憶の良い老舗にあると 彼女たちが母・母親である

しばしば疲れたにも関わらず

沢田四 "ホワイトアイズ " 隈沢前田印刷出版

内で "読作者に書を書く " 鏡花の講座は

松尾秀江 "異界の中母なるものへの憧憬 " 鏡花にとんどの校村郎 " です

既に発表済の "2 " で す が 人ほほば

ぎながら 余々幸せではなかったらしい

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

在野は "ホワイトアイズ " 前田印刷出版

の中で "代々文芸あるをもって " 鏡花の講座は

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

不破 福井 "鏡花の講座 " 前田印刷出版

で "代々文芸あるをもって " 鏡花の講座は

不破 福井 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

不破 福井 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題

新保千代子 "鏡花新出書簡考 " 上京時をめぐる年譜 " と題
<table>
<thead>
<tr>
<th>22</th>
<th>23</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>田山は「鶴花」を「鶴花」に改め、即日刊行した。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>木村庸一・密田良「かねの花」に改め、即日刊行した。</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

発表後、飽くなき物語が話題になった。その中には、「鶴花」の愛読者が多く、発表後すぐに多くの複写本が出回った。さらに、この物語の成功により、多くの作家が選挙に参加することを決意した。